

# 英 語 科

## I 英語学習の能率化と小人数学級

加藤 剛 高橋 恵亮 倉田 有邦 小幡 正躬 松本 青也

### 1. はじめに

本校では、紀要15・16集の教育課程の研究の中の一部門として報告した如く、2年前から中学3年生2クラスを3クラスに分割して、小人数クラスによる授業の効率を高める試みを続けてきた。今年はその試みの第3年目になる訳であるが、過去の2年間においては教師の側からも、生徒の側からも、種々その長所、短所が感想としては指摘されたが、小人数クラス（本校の場合は約30名）が、授業の効率化、すなわち生徒の学力向上にはたして寄与したかどうか、もし寄与したとすればどの程度なのかという点が、明らかにされていなかった。そこで今年是不充分ながら、ある期間3つのクラスの大きさをそれぞれ異なったものにして授業を実施し、成績等を比較することにした。

### 2. 今年のクラス編成

今年4月の学年初めには、過去2年のように1学年2クラス89名を三等分し、30、30、29名の3クラスにした。このクラス編成で3人の教師により、授業方法、進度等をできるだけ揃えるようにして、五月下旬の第1学期中間テストまで授業を行なった。

次に中間テスト終了後、3つのクラスの規模を変えてみることにした。これは過去2年間は、小人数グループといっても、各クラスの人数が大体30名前後の同人数のクラスで、小人数化による授業能率の変化が把握しにくかったので、今年は多少なりとも変化の状態を把握しようとの意図をもって実施した次第である。今度は1つのクラスを15名、2番目のクラスは30名、第3のクラスは44名（自然学級のまま）という編成にした。これは、ちょうど人数比が、1・2・3、となる。さらに15名という数は、かなり理想に近いと思われる人数であるし、30名という数は本校が便宜上、実施していた小人数クラスの数と一致する。また44名という数は、わが国のふつうのクラス規模と一致しているので、それぞれに意味をもった数であろうと思われる。この編成で1学期終了まで、3人の教師により授業を行なった。

次に2学期には、学期初めから2学期中間テストま

での間は、45名と44名の自然学級のままの2クラス編成で授業を行なった。このクラス編成は、一つには1学期に実施した2回のアンケートにより、自然学級のままの1クラスとして授業を受けたい希望を持った生徒がかなりいたこと、一つには、中学3年担当の1教官が、海外研修のため、ちょうどこの間不在だったことによるものである。

2学期中間テスト以後は、学年当初と同じ30、30、29名の3クラスによる授業を行なっている。

できれば、15、30、44名のクラス編成で通年の授業を実施し、成績の関係、生徒の意識等の研究をしたいのであるが、不平等な条件のもとでの授業には、生徒および保護者の間に少なからざる不安感があるので本校においては、極く短期間でこのクラス編成を打ち切らねばならなかった。

以上の本年度の中3クラス編成を表にすれば次のようになる。

時 クラス	1 学 期		2 学 期		3 学 期
	中 間 テ ス ト	期 末 テ ス ト	中 間 テ ス ト	期 末 テ ス ト	期 末 テ ス ト
I	(30)	<u>15</u>	45	30	30
II	(30)	<u>30</u>	45	30	30
III	(29)	<u>44</u>	44	29	29

なお、本篇では、その前後との比較をする便宜上、以後クラスIとは、1学期期末テストまで15名で授業を受けた15名の生徒のことを指し、同様にクラスIIとは上表の下線を施した30名を、クラスIIIとは同様下線を施した44名を指すことにする。

### 3. 小人数クラスについてのアンケートとその結果の考察

第1回のアンケートとして、5月中間テスト終了時に、過去2年と同じアンケートを、全員89名の生徒に対して行なった。これは2年生までの自然学級(45名)と比較して、3年の30名学級をどのように生徒たちが受けとめているかを明らかにするために行なったものである。そのアンケートは次のようなものである。

(1) 5月のアンケート

(A) 英語授業についてのアンケート

4月、5月と3クラスに別れて授業をやってきました。このクラス編成を2年生までのクラス毎の授業の場合と比較して、あなたの感想を書きなさい。

A. よいと思われる点 (箇条書き)

B. 悪いと思われる点 (箇条書き)

C. A, Bを総合した上で現在の30名クラスは

- ア 非常によい
- イ かなりよい
- ウ 2クラスの時と変わらない
- エ あまりよくない
- オ 非常に悪い

(B) アンケートの結果

- A. よいと思われる点 (代表的なもの)
- よく指名される 18
  - 他のクラスの人と一緒に楽しい 12
  - 説明がいきわたってよくわかる 11
  - 授業に集中できる 9
  - 教室が静か 8
  - 質問しやすい 6
  - 先生との親近感 5
  - 緊張する 5
  - 個別的指導が受けられる 3
  - 基礎的指導が受けられる 3
  - 先生の声がよく聞える 2
  - 先生の個性がでておもしろい 2
  - 教室の風通しがよい 1

- B. 悪いと思われる点 (代表的なもの)
- 先生による教え方の差 44
  - よく指名される 10
  - 教室移動がわずらわしい 9
  - 空席があって落ちつけない 6
  - 先生の眼がとどきすぎてきわけない 4

C. の結果と44年度、45年度との比較

年度 評価	46	45	44
ア	3	6	5
イ	38	47	42
ウ	27	12	16
エ	18	18	15
オ	3	6	5
計	89	89	83

(C) アンケートの結果の考察

A, Bの2点において現われた感想, 意見は過去2年とほぼ同じようなものであった。ただ教師の側として, やや意外だったのは, 過去2年の経験と反省に基づいて3人の教官の指導法は, 話し合いの上, できるだけ同じようにした積りであったのに, Bの項目で, 先生の教え方の差と答えた生徒が44名もいたことである。このことは教師としておおいに考えさせられる点を含んでいるとともに, 紀要第16集の中での指摘の如く生徒の側に点数にこだわる過度の競争意識が存在し, それがこのような数となって表われていることを見落す訳にはゆかない。Cにおいてもア, イを合計した数が, 41名と過去2年よりも少ないのも注目に値する。

第2回のアンケートとして7月の期末テスト終了後クラスⅠ(15名)とクラスⅢ(44名)に対して, 生徒が中間テストまでの例年のような30名クラスと, それ以後のクラス編成との差をどのように感じているか調べるために次のようなアンケートを実施した。

(2) 7月のアンケート

(A) 英語授業についてのアンケート

中間テスト以後のクラス編成について, 4月5月の3クラス編成と比較して, あなたの感想を書きなさい

A. よいと思われる点 (箇条書き)

B. 悪いと思われる点 (箇条書き)

C. A, Bを総合した上で現在のクラス編成は

- ア 非常によい
- イ かなりよい

- ウ 2クラスの時と変わらない
- エ あまりよくない
- オ 非常に悪い

- B 悪いと思われる点 (代表的なもの)
- 指名される回数が少ない 11
- さわがしい 5
- 人数が多すぎて落ちつかない 4

D. 自然学級と比較して現在の15名クラスは

- ア 非常によい
- イ かなりよい
- ウ 2クラスの時と変わらない
- エ あまりよくない
- オ 非常に悪い

※DはクラスⅠのみ解答

Cの結果

ア	12
イ	8
ウ	14
エ	9
オ	1
計	44

(B) アンケートの結果

クラスⅠ

- A よいと思われる点 (代表的なもの)
- よく指名される 7
- 質問しやすい 6
- 声がよく聞える 3
- 説明がよくわかる 2
- B 悪いと思われる点 (代表的なもの)
- だらける 3
- 陽気になり過ぎる 2
- 教室が空き過ぎる 2

C, Dの結果

	C	D
ア	4	5
イ	6	5
ウ	4	5
エ	1	0
オ	0	0
計	15	15

クラスⅢ

- A よいと思われる点 (代表的なもの)
- クラスの団結 16
- 人数が多いと楽しい 10
- 教室が固定している 9
- 大勢の意見が聞ける 4
- 空席がなくて、心が落ちつく 4
- 大勢のため競争心がおこる 4

(C) アンケートの結果の考察

まずクラスⅠにおいてAとして、よく指名される。質問しやすいなどの意見が多かったのは、予想された通りだった。Bとして、だらける、陽気になり過ぎるとの意見があったのは、教室の雰囲気がいかに、気楽になり過ぎて、学習に必要な適度の緊張が欠けていることを示しているものであり、一考させられる点である。また教室の大きさも15名クラスには、それに適した小さな教室が必要なことも、生徒の意見として現れている。このことは、教師としても設備の点では是非必要と感じている点である。

また、C, Dに関して言えば、ア, イ, ウに全員が入っている。授業を受ける生徒としては、小人数学級も15名まで減ると、効果があると感ずるようである。このことは諸文献に表われた諸家の説とも大体一致するところである。

またクラスⅢにおいては、Aとしてクラスの団結と答えたものが16名もいたことは、学習には、単に数値的なものの他に、心理的要素がかなり大きな力を持っていることが考えられる。また、「人数が多いと楽しい。」「大勢の意見が聞ける。」などの意見は、授業には教師対生徒の関係の他に、生徒間相互の関係が存在し、生徒相互の助け合いも授業の能率化には、与って力があるということが考えられる。Bとして指摘された点は、当然予測されることばかりである。

Cとしてア, イの合計が20名、それに対してエ, オの合計が10名ということは、生徒の意識としては、一度30名クラスを経験し、その長所はある程度認めつつも、むしろ自然学級の方がよいと思うものが相当数いることを示している。もちろんこの少数の生徒のしか

も短期間の実験の結果から、結論をひきだすつもりは毛頭ないが、すくなくとも本校の生徒の中には、小人数学級も15名程のクラス規模ならともかく30名程度の

中途半端な数なら、心理的な面、その他考慮すれば、特に望ましいものでもないという考えの生徒が相当数いることは充分推察されるところである。

### 3. 成績の変化

#### (1) 得点度数分布表

クラス I

得点	1 学期		2 学期	
	中間テスト	期末テスト	中間テスト	期末テスト
90 ~ 100	0	0	0	1
80 ~ 89	2	3	0	0
70 ~ 79	0	1	2	3
60 ~ 69	1	1	1	0
50 ~ 59	2	2	2	3
40 ~ 49	3	3	4	1
30 ~ 39	5	3	4	3
20 ~ 29	1	1	2	0
10 ~ 19	1	1	0	2
0 ~ 9	0	0	0	2
平均点	46.3	50.6	45.6	44.7

クラス III

得点	1 学期		2 学期	
	中間テスト	期末テスト	中間テスト	期末テスト
90 ~ 100	1	1	0	3
80 ~ 89	3	3	2	5
70 ~ 79	5	5	4	2
60 ~ 69	6	7	6	2
50 ~ 59	7	9	7	6
40 ~ 49	5	3	8	9
30 ~ 39	13	12	9	7
20 ~ 29	4	3	2	7
10 ~ 19	0	1	6	3
0 ~ 9	0	0	0	0
平均点	51.9	51.9	45.8	50.02

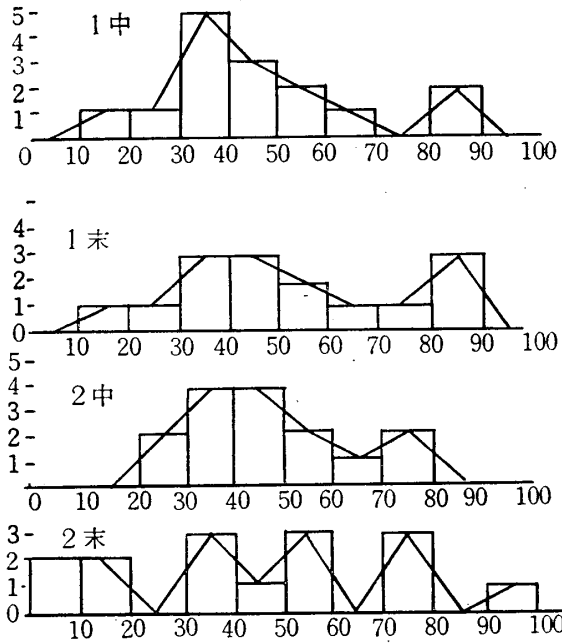
クラス II

得点	1 学期		2 学期	
	中間テスト	期末テスト	中間テスト	期末テスト
90 ~ 100	1	1	1	0
80 ~ 89	2	3	2	5
70 ~ 79	4	3	2	6
60 ~ 69	3	3	5	1
50 ~ 59	6	6	5	5
40 ~ 49	5	5	9	4
30 ~ 39	4	3	1	2
20 ~ 29	2	2	2	4
10 ~ 19	1	2	2	2
0 ~ 9	2	2	1	1
平均点	49.8	51.3	51.5	53.2

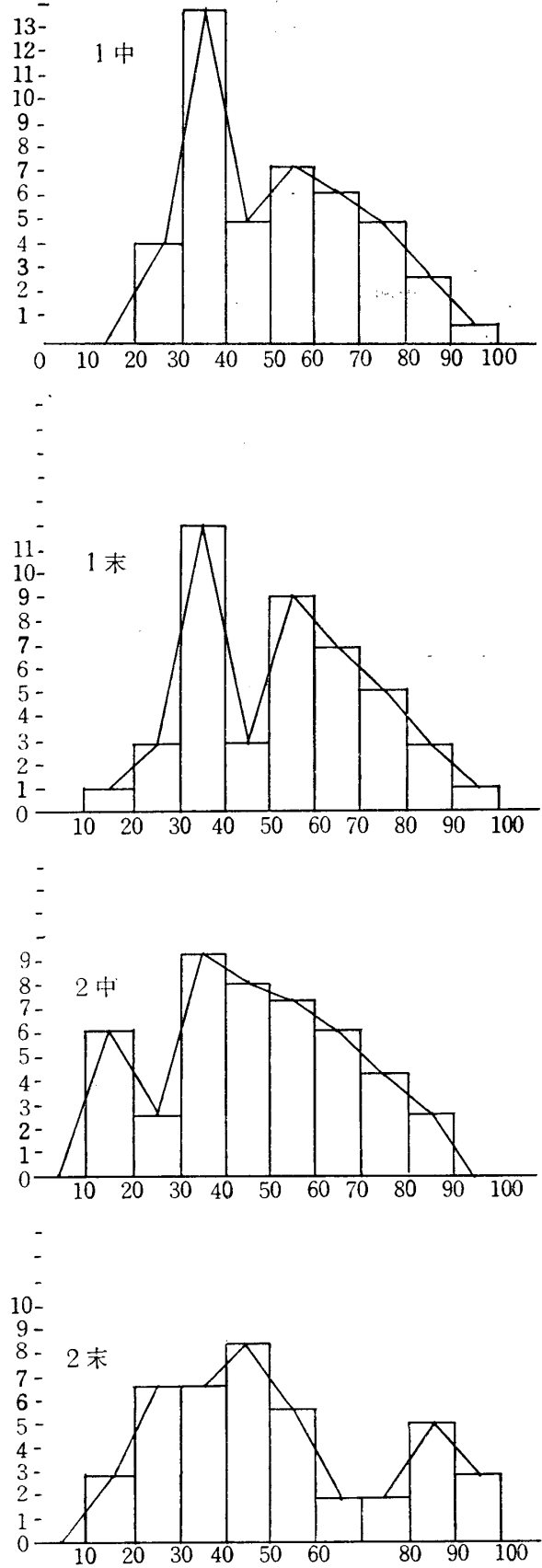
中3学年全体

得点	1 学期		2 学期	
	中間テスト	期末テスト	中間テスト	期末テスト
90 ~ 100	2	2	1	4
80 ~ 89	7	9	4	10
70 ~ 79	6	9	8	11
60 ~ 69	10	12	12	3
50 ~ 59	15	16	14	14
40 ~ 49	13	10	21	14
30 ~ 39	22	18	14	12
20 ~ 29	7	7	6	11
10 ~ 19	2	4	8	7
0 ~ 9	2	2	1	3
平均点	50.5	51.5	47.7	50.2

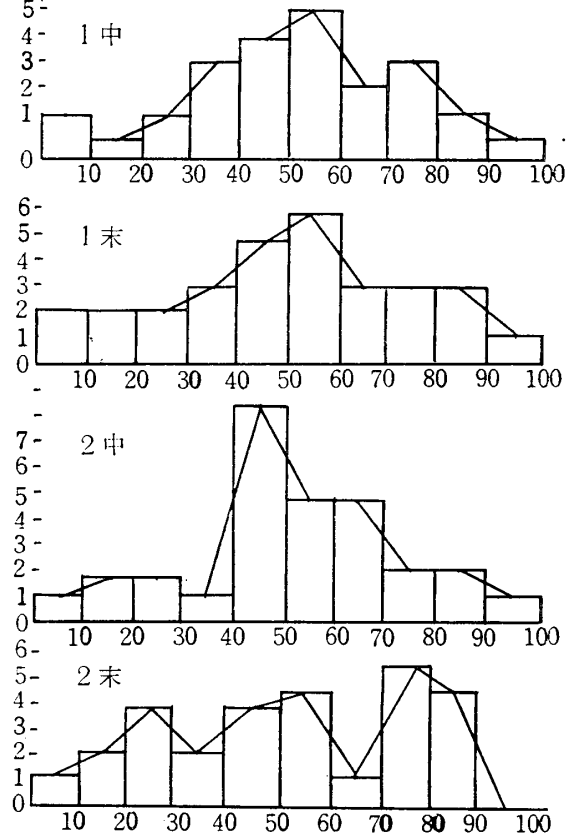
クラスⅠ



クラスⅢ



クラスⅡ



(3) 順位上昇者数・下降者数の変動

クラスⅠ

1中 → 1末

下 降	不 動	上 昇
6人	0人	9人

1中 → 2中

下 降	不 動	上 昇
7人	0人	8人

1末 → 2中

下 降	不 動	上 昇
8人	2人	5人

クラスⅡ

1中 → 1末

下 降	不 動	上 昇
14人	5人	11人

1中 → 2中

下 降	不 動	上 昇
9人	3人	18人

1末 → 2中

下 降	不 動	上 昇
9人	4人	17人

クラスⅢ

1中 → 1末

下 降	不 動	上 昇
22人	2人	20人

1中 → 2中

下 降	不 動	上 昇
31人	2人	10人

1末 → 2中

下 降	不 動	上 昇
25人	3人	16人

(4) 順位差の変動(順位差の合計)

クラスⅠ

1中 → 1末

下 降	上 昇
- 49	+ 112

1中 → 2中

下 降	上 昇
- 55	+ 74

1末 → 2中

下 降	上 昇
- 94	+ 59

クラスⅡ

1中 → 1末

下 降	上 昇
- 121	+ 119

1中 → 2中

下 降	上 昇
- 130	+ 280

1末 → 2中

下 降	上 昇
- 110	+ 257

クラスⅢ

1中 → 1末

下 降	上 昇
- 297	+ 212

1中 → 2中

下 降	上 昇
- 399	+ 205

1末 → 2中

下 降	上 昇
- 350	+ 234

1中 1学期中間テスト  
 1末 1学期期末テスト  
 2中 2学期中間テスト

(5) 成績変化の考察

得点度数分布表、ヒストグラム、順位上昇者数下降者数の変動、および順位差の変動を考察してみると、得点度数分布表、ヒストグラムで見える限りにおいてはクラスの大きさはほとんど成績に関係がないように思

われる。しかし順位上昇者数、下降者数の変動および順位差の変動を調べてみると次のようなことが一応考えられる。

まずクラスⅠについては、1学期中間テストと1学期期末テスト(すなわち、クラスの大きさでは、30名

と15名)を比較すると、人数、順位差とも上昇が下降を上まわっている。また1学期中間テストと2学期中間テスト(クラス人数比30:45)の比較では人数、順位差とも、おおむね保ち合いの状態である。また1学期期末テストと2学期中間テスト(クラス人数比15:45)では、人数、順位差とも下降が上昇を上まわっている。

クラスⅡについては、1学期中間テストと2学期中間テスト(クラス人数比30:45)、および1学期期末テストと2学期中間テスト(クラス人数比30:45)を比較すると、人数、順位差とも30名の場合より、逆に45名の自然学級の方が上昇が下降を大幅に上まわっている。このことはアンケートにおいて、30名クラスより自然学級の方がよいと答えた生徒が20名、30名クラスの方が自然学級よりもよいと答えた生徒が10名という事実とも一致して興味深い。

クラスⅢについては1学期中間テストと1学期期末テスト(クラス人数比29:44)および1学期中間テストと2学期中間テスト(クラス人数比29:44)を比較すると人数、順位差とも下降の方が上昇を上まわっている。しかし、1学期期末テストと2学期中間テスト(クラス人数比44:44)を比較してみると、やはり下降が上昇を大幅に上まわっている。これはこのクラスは1学期中間テスト以後、ずっと44名クラスという悪い条件で授業を受けていたからと、一応は理由付けが考えられるが、この場合はむしろこのクラスの生徒の学習意欲その他を含めたクラスの性格に起因すると考えた方が自然であろう。

#### 4. おわりに

本校に於ける英語学習の能率化のためのクラスの人数を変えてみる試みは、種々の制約のために実施期間も短かく、対象人員も非常に少なく、評価の方法にも研究の余地があるので勿論結論めいたことは何も云えないと思うが、テストの結果だけから考察すれば小人数学級も15名となると一応効果が挙っているが、30名となると予期に反して効果は挙ってなくて、むしろマイナスに作用しているようである。

言語の学習は練習によって達成され、その技能の向上は練習量に比例すると考えられるから、クラスの大きさが小さくなれば、1人当りの練習量が増加し、それだけ成績が向上して当然である。しかるに、このような結果になったのをどのように理解すべきであろうか。

一つには、ちょうどクラスの大きさを変えた時期の教材が、関係代名詞の導入の単元であって、授業の内容がかなり説明的になって、音声面の drill が少なかったことに起因すると考えられる。このことは諸文献

に述べられているように小人数学級が、特に Speech の習得を目的とする際に効果を発揮するものであることを考えれば、ある程度首肯されることである。

第二には、生徒のアンケートの結果にも現れているように、30名クラス編成のためのクラス分割による心理的不安定に起因するものと考えられる。授業は単に教師が一方的に教えるだけでなく、生徒が助け合って授業を創造してゆく面が考えられるので、人数は多少多くても自然学級で団結し、心理的に安定して授業を受けた方が時にはよい結果を生ずることもあるものと思われる。

次に小人数クラス編成の学年について、一言すれば本校では第1年目に、教官定員、時間割等の関係で1学年しか実施できないので、高校入試を控えた中学3年に実施し今年まで継続したものである。しかしスペアマン順位相関係数を調べてみると、1学期中間テストと1学期期末テストでは0.86、1学期中間テストと2学期中間テストでは0.82と、相関係数が高い。このことから英語学力は中学3年においては、すでにかなり固定化しているものと思われる。したがって、このような試みは、むしろ中学低学年において実施した方が効果的と考えられる。

最後にこの研究を実施するに当たって、参考文献を探してみたが、意外に少なくてまたまあっても単に適切なクラスの大きさは何人以下と、人数の記述があるだけでその理論的根拠、実験データに関する記述はほとんど見られなかった。なお、それらの文献がすべて小人数クラスを是とする中で、UNESCOのHamburg Reportの中にソ連における実験の報告には次のように述べられている。

The children who were five to six years old belonged to the intermediate and senior groups of the nursery school. Their foreign language activities lasted half an hour a day three times a week. The size of the experimental groups ranged from 13 to 15 children in one to 28 and 30 in another. The success of the experiment seemed to be unaffected by the size of the group.

(H.H. Stern: Foreign Languages in Primary Education)

#### 参考文献

H.H. Stern: Foreign Languages in Primary Education

飯野至誠: 英語の教育—変遷と実践—

芹沢栄他: 言語教師の本質と目的